

「他人指向」の殉教者

——別役実の『風のセールスマン』——

村 尾 敏 彦

別役実の戯曲『風のセールスマン』は、2009年に柄本明の独り舞台で初演された。この戯曲が、『やってきたゴドー』、『犬が西向きゃ、尾は東』とともに掲載されている著書『やってきたゴドー』のあとがきで、別役実は「住まう」ことと「流れる」ことについて論じている。戦後日本社会が高度経済成長を実現し、「中産階級」を自称した人々（小市民）が、バブル崩壊後、「住まう」から「流れる」へと変貌し、それを表現したのが『犬が西向きゃ、尾は東』（2007年初演）である、と別役は解説している。さらに、『犬が西向きゃ、尾は東』は、1970年代に創作した『にしむくさむらい』『あーぶくたった、にいたった』などの、「一連の「小市民」もの続編」（245）であるとしている。

そして、『風のセールスマン』についても論じている。

『風のセールスマン』の方は、あらかじめ「流れる」ことを旨とするセールスマンが、「住まう」ことを期待し、結局それに失敗するという、「流れる」ことと「住まう」ことの、最も基本的ないきさつについて、確かめたものである。これも、アーサー・ミラーの『セールスマンの死』の続編、もしくは現代版との意識がなかったとは言わない。ただし、『セールスマンの死』のウィリー・ローマンが、西部開拓時代のいわば或る意味での「流れる」精神を目指し、結局それに失敗してしまったのに反し、『風のセールスマン』の男は、「住まう」ことを目指し、それに失敗するという逆の結果になっている。（246）

自作の戯曲について「続編」と語ることに比べて、アーサー・ミラーの作品の「続編」と称することには強い意図を想定すべきであろう。ましては、『セールスマンの死』（*Death of a Salesman*）（1949年初演）はアメリカ演劇界の傑作のひとつと言われている。1949年から2009年までの年月の推移をふまえて「現代版」という表現が出ているのであろう。『風のセールスマン』が『セールスマンの死』の続編であるとは、どのような意味をもつのか。『風のセールスマン』の現代性とは何か。これらの問いに答えることが、本論の課題である。

ウェラント (Dennis Welland) は、著書『アーサー・ミラー』(Arthur Miller)において、『セールスマンの死』とリースマン (David Riesman) の『群衆の孤独』(The Lonely Crowd)との間に類似性をみいだして、この戯曲は「他人指向型社会に適応しようとした内部指向型の男がアノミーと人格の完全崩壊に終わった物語」(the story of an “inner-directed” man whose efforts to “adjust” to an “other-directed” society result in “anomie” and the complete disintegration of personality) (61) であると言う。『群衆の孤独』はこの戯曲のみならず『風のセールスマン』の理解をも促進してくれるように思われる。だが、リースマンが提案する「伝統指向型」(tradition-directed types)「内部指向型」(inner-directed types)「他人指向型」(other-directed types)といった社会的性格は、集団の性格を表現する理念型であって、個々の人間が完全に内部指向型であるわけではない。

リースマンの3つの社会的性格は、人口成長曲線に対応している。人口成長のS字曲線の底辺部分は、高度成長潜在的時期であり、人々が伝統に従うことで社会的同調性が保証される。これが伝統指向型社会である。S字曲線の垂直部分は人口成長期を表し、その社会は内部指向型である。人々は、自身が生きるための判断基準を内部に保持している。S字曲線の横這い部分は人口が減少へ向かう時期であり、他人指向型社会に対応して、構成メンバーが周囲の他人の意向に敏感になることで、その社会の同調性が保証される。

戯曲から読み取れるウィリーは、内部指向的傾向もあり、少しだが他人指向的傾向もある。戯曲中でもっとも内部指向性の強い人物は、ウィリーの兄ベンであろう。リースマンによれば、20世紀半ばのアメリカ社会は、急激な人口上昇の成長期から初期の人口減退の時期へ移行しつつあり、内部指向型社会から他人指向型社会に移行しつつある。他人指向型社会は、第三次産業の従事者が増え労働時間が減り物質生活が豊かになって、資本主義が高度に発達して中心的活動が生産から消費へと変化している。

『セールスマンの死』は、ウィリーの現在と過去のふたつの次元が交互に舞台に現れる。現在の次元では、ウィリーは60歳を超えて妻のリンダと二人暮らしで、すでに成人した二人の息子ビフとハッピーがたまたま自宅に戻ってきている。そこに、古いつきあいの友人チャーリーが現れたり、ウィリーが雇い主のハウードの事務所を訪れたり、レストランで息子たちと待ち合せたりする。現在の場面は、月曜の夜から火曜の夜までである。過去の次元は、子ども時代の息子たちとの生活のありさま、ウィリーの兄のベンが訪れて、ともにアラスカに行こうと誘う場面、仕事先のモーテルでの浮気の場面などである。アーサー・ミラーの *Collective Plays* の序文によれば、この戯曲のタイトルの最初の候補は「彼の頭の内部」(*The Inside of His Head*) (23) であった。すると、ウィリーが現在を生きながら、同時に過去を回想して、現在と過去とを織り合わせて自身が生きている世界の意味を構築していく状況が舞台上に展開していく、と解釈でき

る。そして、戯曲の最後にウィリーの葬式の場面がある。そこだけは、ウィリーの意識を通しての表現ではない。

回想シーンの中で、父親は西部開拓時代に家族を引き連れて馬車で移動し、途上でフルートを作って町で売り大金を手に入れる。父親は頼りになる独立独歩の内部指向型の人物であるらしい。ウィリーは父親と別れたときが3歳で、直接的な父親の記憶は乏しいのだが、兄のベンという言葉から父親へのあこがれを育てている。ウィリーの兄ベンは、父親の後を追ってアラスカに行こうとして誤ってアフリカに着き、ダイヤモンドを掘り当て大金持ちになった、という荒唐無稽なエピソードが現れる。この回想は、ウィリーの収入が激減していることを心配しているチャーリーがやってきて、ウィリーとカードを始める現在のシーンに挿入されている。チャーリーが職を与えようとして話を向けると、ウィリーは、2、3週間前に亡くなったベンがかつてウィリーのもとを訪れ、ウィリーにアラスカに行って仕事をするを勧めたことを思い出したのだった。リンダの反対もあり、そのときウィリーは断ったのだが、いまそれを後悔しているのだった。回想シーンは、現在のウィリーの心理と深く結びついている。

ベンを前にして、ウィリーは息子のビフとハッピーを紹介したあと、家の玄関の修理のために、息子たちに近くの建築現場の砂を盗んでくるように命じる。その場に居合わせたチャーリーとリンダはこれに反対するが、ウィリーはそれを無視する。さらに、息子が以前は角材を盗んできたことを、ウィリーは自慢する。ベンがビフに自分に殴りかかってくるように挑発し、ビフがその気になると倒して傘の先端をビフの目の上で構え、「知らない奴とけんかするときはまともにやってはだめだ」(Never fight fair with a stranger, boy.) (158) と教える。ベンは他人との人格的なつきあいに関心はなく、周囲の他人からどう評価されるかも気にしない。ウィリーに向かって、「ウィリアム、おまえの子どものしつけは一流だ。立派な男らしい少年だ」(William, you're being first-rate with your boys. Outstanding, manly chaps!) (159) と言い、ウィリーを喜ばせる。ウィリーが、どのように教育すればいいのかを尋ねると、「わしがジャングルに入ったとき、わしは17歳、出てきたときは21歳、そうしてなんと、金持ちになっていた」(when I walked into the jungle, I was seventeen. When I walked out I was twenty-one. And, by God, I was rich!) (159-160) と答える。子どもの育て方に不安をもっていたウィリーは、このベンという言葉にすがりついた。不安を抱えるウィリーは、ベンに出会ったときの過去のウィリーであるだけでなく、ビフについて心配する現在のウィリーでもある。フリーマンによれば、他人指向型の人が同時代の他人の意見を尊重するのに対して、内部志向型の間人は、古い世代の声に耳を傾ける。ウィリーは、ベンの独立独歩の性格にあこがれ、息子たちにもそうなって欲しいと願うのだった。

ウィリーには、もうひとりの理想の人がいた。デブ・シングルマンというセールスマンで、84歳で移動しながら31州に商品を売っていた。ホテルの部屋から電話でバイヤーと連絡を取るだけで仕事を行っていた。電話だけで知人が喜んで仕事に協力してくれるほどに人脈をもち人々に尊敬されていた。葬式には、何百人もセールスマンやバイヤーが集まった。ウィリーの雇い主

(18)

のハワードに会い、ニューイングランに移動してセールスをする仕事から、地元のニューヨークでの勤務に変更してくれるように要望しているときに、ウィリーはこのエピソードを思い出して話したのだった。このエピソードも、ウィリーによって誇張され理想化されているように思われる。ベンとともにアラスカに行って父親を探そうと決心しかけたときに、デイクに出会って、この理想のセールスマンを目指すことになった。ハワードがウィリーの要望を拒んだため、ウィリーは激高しその結果、いまの職まで失ってしまう。チャーリーに対しても、ハワードに対しても、ウィリーは他人との関係を円滑に維持するための配慮に欠け、自身の信念を一方的に主張する点で内部指向的である。

この戯曲の設定場所はニューヨークで、登場人物たちの多くは中産階級であり、リースマンの言う他人指向的傾向を見て取ることができる。ウィリーは25年ローンで家を購入し、最近では妻のリンダとともにフロリダにレジャーで訪れた。ウィリーたちは、自動車、冷蔵庫、洗濯機、掃除機を購入し、その修理代、購入代金の月賦の支払いに苦勞している。購入した冷蔵庫について、リンダは「あそこが、いちばん大きい広告を出していた」(They got the biggest ads of any of them!) (148) と言う。20世紀半ばのアメリカでは、すでに、メディアが消費欲望を人々に植え付け、人々は消費活動に自らの存在の証を感受し始めるようになっていたらしい。

リースマンは、子育ての歴史的変化をも説明している。アメリカの内面指向型社会では、社会的地理的な流動性が高まり、人々は新しいフロンティアに挑戦しなければならなかった。社会が急速に膨張し変化していくため、人々は生計をたてるために移動し、そこで新しい職と暮らしをつくっていった。伝統指向型社会では、子どもたちは両親を模倣することで生き方を学ぶことができたであろうが、内部指向型社会では、両親は子どもにそれぞれに人生を切り開いていくものと教える。子どもは自分が何をすべきなのかを決定しなければならず、フロイトが言う超自我のように、自分の内部の理想から発せられる信号に敏感になる。

20世紀半ばになると、両親は子どもが仲間集団の中で、友だち付き合いがうまくできることを大切にできるようになる。他方で、両親は、どのように子どもを育てるべきなのか、他人の意見に耳を傾けるようになる。他人指向型社会で重要なのは、周囲の他人がどう思っているかを知り、自分のおかれた位置と評価を確認することである。ウィリーもリンダも、2人の息子、特に長男のビフが高校時代に仲間集団で人気者であることを喜んでいて、ウィリーは他人に好かれることを何よりも重視している。バスケットボールを盗んだビフに対して、「コーチはお前が好きなんだ」(he likes you) (144) という始末である。近所に住む友人チャーリーはあまり人に好かれませんが、自分にはたくさんの友人がいると自画自賛する。

だが、セールス中に周囲の人々が自分を見る視線を気にして、ウィリーはハートフォードで自分は好かれていない、「わしは太ってる。ひどく……バカみたいなんだ、見た目。」(I'm fat. I'm very—foolish to look at.) (149) とも言う。ウィリーは、誰よりも息子のビフに愛されたいと願っており、そのため不安に苦しめられる。ビフが自分を愛しているという確信を抱いた直後に、ビフに生命保険金を与えるために自殺する。こうした子育ての中に、ウィリーの他人指向性

を見て取ることができる。内部指向型の両親は道徳的権威をもって子どもにきびしく命令し、それによって子どもに自分がどう思われるかを心配しすぎることはない。しかし、他人指向型の両親は、子どもが友だちと仲良くやっけていけるように育てようと努力し、子どもを操作しようとして同時に子どもに操作されてもいるが、それでも子どもに好かれたいと思う、とリースマンは指摘している。

他人指向型の傾向を最も強く表しているのは息子のハッピーであろう。リースマンによれば、内部指向型の人間は、自分の所有物であることにこだわる物質主義者だが孤独には強い。それに対して、他人指向型の人間は、物質主義的でなく、むしろ関心の対象は他人であり孤独に弱い。ハッピーは、アパートや自動車を所有することによって、自らが満たされることはない。他人指向型の社会では、性が子どもを産むことから切り離され楽しむべきものとなり、異性を引き付ける力を試すことを楽しむようになる。ハッピーはリンダから非難されるほどに、多くの女性たちと次々に付き合っているのだった。

『セールスマンの死』では、生命保険で息子が金を手に入れることを期待して主人公が自殺し、その葬式に参列した友人のチャーリーが、セールスマンの定義を、「セールスマンには、生きてることにしっかりした基礎はないんだ。」(for a salesman, there is no rock bottom to the life) (221)、「あそこの青空に浮かんでいる男、笑顔とよく磨いたくつ次第なんだ」(a man way out there in the blue, riding on a smile and a shoe shine.) (222) と語る。似ていながら少しずつ異なる多くの商品の中から選び取ってもらうためには、セールスマン自身が顧客に好かれなければならない。そのために、笑顔、話し方、服装などを細かくチェックして顧客に向かう。昨日売れたからと言って、今日また売れるという保証はどこにもない。売れなければ賃金が下がるかもしれない、仕事を失う危険さえある。セールスマンは、きわめて他人指向的な職業である。ウィリーは他人指向型社会の中で、周囲のウィリーに対する評価があまりにも低いことに気づき、挫折したのだが、息子ビフへの愛によって救われ、喜びの中で自殺に向かった。観念としての愛は人の内部に生まれ、外部世界を無化できるほどに堅固な基準となっていた。ウィリーは、愛という内部指向的価値の代わりに、自身を放棄したのだ。

II

リースマンによれば、ヨーロッパで内部指向の傾向が始まるのは、ルネッサンス、宗教改革からである。数百年の年月を経て内部指向型が定着し、これに対応する哲学や自我論や自由論が発展していった。そのあと、他人指向的傾向が始まるのだった。ところが、日本では江戸時代まで伝統指向型社会であって、明治維新後に人口の上昇とともに内部指向型が始まったようである。農村地帯では戦後まで伝統指向的傾向が強かったであろう。近代小説に見られる文学的内面性の生成は、日本の内面指向的傾向の出現の兆候であろう。だが、21世紀に入ると人口が減少を始め、百年あまりで他人指向型社会への移行が始まったようだ。日本では十分に内部指向が定着し

(20)

ないままであった。西洋的的市民社会を模倣しようとした大正デモクラシーは国家主義によって根こそぎにされた。戦後民主主義もまた日本の現実に根付くことなく、歴史の推移の中で容易に忘れ去られようとしている。20世紀後半に日本の思潮において、ポスト・モダンと呼ばれた傾向が広まったことは、他人指向的傾向の兆候であろう。

リースマンの3つの社会的性格論を日本に適用する試みを、大野邦夫（「ドキュメント文化と社会的性格-D. リースマンの思想に基づく考察」）が行っている。明治維新から第二次大戦後の高度経済成長までを内部指向の時期と呼び、戦前は国家主義的統制によって個人の自由が制限され、そこでの価値観は立身出世主義であったと指摘している。日本社会は学歴身分社会であり、年功序列と終身雇用がそれを支えた。1990年代から本格的に他人指向の時代を迎え、規制緩和、市場開放、市場の国際化といった背景の中で、学歴よりも実力が重視され、終身雇用が狭まり転職が多くなり、インターネットを活用したマスメディアの高度情報化社会が現れた、と説明している。たとえば、現在では、SNSに投稿して「いいね」という返答を多くの他人から受け取るとは、人々に大きな満足を与えている。こうした傾向は、情報化社会の他人指向性を示していると言えるであろう。

他人指向型社会へと向かっていることの兆候のひとつは、2006年から経済産業省が提唱している「社会人基礎力」に見ることができる。ここでは、就労現場で多くの他人と仕事をしていくために、専門知識以外に3つの能力が必要だとしている。「前に踏み出す力」「考え抜く力」に加え「チームで働く力」が入っていることが、他人指向型社会の特徴であろう。「チームで働く力」の中には6つの能力要素が挙げられている。その中には「柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）」や「状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）」がはいっている。周囲の他人がどんなことを考えているのか、自分をどう評価しているのか、自分と他人がどんな関係性の中にあるのか、これらを理解することは、他人指向型社会に適応するために必須である。「前に踏み出す力」は内部指向的な傾向を予想させるが、要素能力として「主体性」「実行力」に並ぶのは「働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）」である。あくまでも他人との協働の中で目標を実現することが重視されている。

リースマンは、20世紀半ばでは他人指向はまだ始まったばかりで将来どんな展開を見せるかわからないとも言い、他人指向型社会が抱える問題を挙げている。仲間集団の中で、互いに評価しあい人気投票的な考えが共有され、友たちが最大の消費の対象となり、各メンバーはその集団を消費するようになる。こうした仲間集団がひな形となって、社会のあちこちの組織の運営が行われる。そこには、内部指向的な独断と専横でなく、一定の公正が機能する。だが、他人指向型の人々は、他人たちに適応しようとして失敗すると、感情を失い表情が空虚な状態に陥ることがある。また、自分が何を求めているのかを把握できないため、集団の中に埋没すると自身の目標をもてなくなる。こうした課題を解決する方策として、リースマンは、自我意識を高めることで、他人からの自律性を確立することを提案した。川田耕は評論「D. リースマン『孤独な群衆』-画一化と多様化」において、現代社会の多様性と画一性という矛盾した様相を分析し、リースマン

の言うような自我意識ではその解決は不可能であるとして、リースマンの現代社会論には社会的権力への洞察が欠けている、と指摘する。画一化を生み出す強制力としての社会的権力こそが現代的課題であると、川田は主張している。

リースマンは、20世紀半ばを、急激な人口上昇の成長期から初期の人口減退の時期への移行の時期と想定しているが、実際のアメリカの人口は、20世紀半ばの1億5000万人から増え続け、21世紀初めには3億人を超えている。むしろ日本の方がリースマンの理論に適合している。明治維新からの人口成長期を経て、21世紀になると明らかに人口減退期にはいつているのであるから。リースマンが目にしてきた20世紀半ばのアメリカ社会よりも、さらに他人指向傾向が強い社会に現代日本は達しているのかもしれない。なぜなら、内部指向型社会がわずかな時期しか存在せずに、100年ほどですぐに他人指向型社会に移行したため、日本には個我意識が十分に定着しないまま、周囲の他人集団へ同調することが重視される社会になった。ヨーロッパのピューリタン主義は、資本主義を生み出すのに貢献する一方で、現実に対抗しうるほどの強固な観念空間を構築した。アメリカのフロンティア・スピリットは、先住民への支配と抑圧を実行しながらも、新しいコミュニティの理想を抱きうるほどの自由を人々の内部に植え付けた。これらと比べて、日本の立身出世主義は、秀才たちが郷土を捨てて都市に集まり、社会の支配機構の中を上昇し続けるための、内的駆動力であった。そうして、郷土の地域共同体から離脱し、国家や企業などの組織の中で精進したのだった。そこでは、世界に対峙する個我意識の形成は困難であった。

他人指向型社会では、人は他人たちの意思の動向に敏感であり、仲間集団の中で自己を位置づけアイデンティティを獲得できる。リースマンは、そこである程度の公正さが機能すると指摘しているが、こうした仲間集団の負の機能として「いじめ」を挙げることができる。別役実が評論『ベケットと「いじめ」』で言及している東京都の事件（1986年）を例にとって考えたい。中学2年生のS君がスケートボードで遊んでいて怪我をしたあとで登校すると、教室では「葬式ごっこ」が催されていた。黒板前にS君の机が置かれ、上には写真、寄せ書きの色紙があり、牛乳瓶には水と花が入っていた。およそ4か月後に、S君は駅ビルのトイレで首つり自殺をし、遺書を残した。

この「葬式ごっこ」を別役は以下のように分析している。首謀者がいて悪意をもって「葬式ごっこ」が提案され、同調者が冗談と思い偶発的に参加していったであろう。だがもしも、ひとりひとりが独立した行為者であったら、途中で「これは、冗談ではすまないのでは」といった葛藤が生まれるはずなのに、それが見えてこない。したがって、計画性と偶発性、首謀者と同調者、遊びと悪意、これらが混合して不明確になっている、と別役は説明する。加害者たちは「遊び」であるという気分を共有しながら、自立した判断力をもつ個人であったら行えないはずの陰湿ないじめから離脱することができなかった。ここには、他人指向型のいじめの、底のない沼のような気味悪さがある。

別役は、S君の遺書から、被害者の苦悩というよりも、諫死的な何かを感知し、「自己主張と

(22)

しての自殺」(54) かもしれないと言う。S君は、教室に入って「葬式ごっこ」を目にして、同級生たちを攻撃も批判もせず、逃げ出しもしなかった。もしもそうしていたら、近代的個人、独立した行為者となったであろう。S君は遺書を残して自殺することで、「関係の中での被害者として、被害の状況を決定的な動かしようのないものにして」(81)、仲間集団に、加害の責任を引き受けさせようとした。別役は、近代的個人に対して、関係の中の「孤」という言い方で、現代の人間を捉えようとするが、これはリースマンの内部指向に対する他人指向に対応しているようだ。

III

『風のセールスマン』の冒頭は、コーモリ傘とトランクをもったセールスマンのオキモトが歌いながら現れる。

あの日
あの街を
歩いた
秋の
青空
赤トンボ
雨でもないのに
雨傘さして

(201)

どうして雨傘をさすのか?と、オキモトは自問する。そして「そうだよ。恥ずかしかったんだ、アタシは。秋の空の下に生で立っているのがね……。赤トンボじゃないんだから……。セールスマンなんだから……。」(202)と言う。さらに「セールスマンてものはね、どこにもいないんだ……。ただ、通り過ぎるだけ……。風のように……。」(203)と定義する。

つまり、セールスマンと話して商品を注文することに決めれば、セールスマンは姿を消し、顧客の手元には注文書が残るが、セールスマンのことなどすっかり忘れてしまう。だから、戯曲のタイトル「風のセールスマン」の「風」は文法的にはセールスマンと同格なのだ。オキモトはさらに、「秋が一番つらいんだ、セールスマンには」(211)、秋は「ありありとセールスマンであることを際立たせる」(212)からと言う。秋の青空の下、自分が歩いているのを他人が見てどう思うのかを想像しては思い悩み続けるのである。ここには、ウィリーが抱いた「伝説のセールスマン」へのあこがれなど成立する余地がない。

はじめは、オキモトは独り言を言っているように見えるが、まもなく観客に向かって話しかける。オキモトは誰か想像上の人物に向かって話しているはずなのだが、ト書きによればオキモト

を演じる役者は観客に向かって話している。ここではストーリー世界と劇場空間との二重性がどちらとも決定不可能な状態で宙づりになっている。ストーリー世界の中で、オキモトの周囲には誰もいないはずであり、オキモトはここにいない誰かに向けてこの作品の最後まで語り続けている。観客はオキモトの独り言をのぞき見しているのだ。『セールスマンの死』のウィリーの場合に似て、主人公の意識の中に半ば入り込んだところに、物語の想像線が描かれている。

オキモトは、他人に見られているときだけでなく、見られていないときにも、他人が自分を見てどう思うかを想像する。他人が理解できて受け入れることのできる人でありたいと考えている。もしも誰かがやってきて「お前さんどうしてこんなところにいるんだい」(202)と尋ねたら、あるいはそう心の中で思ったら、オキモトも心の中で適切に答えたいと考える。たとえば、主任が渡してくれたセールス用の地図を広げて、「これこれこういうことでここにいるんだ」(202)と語りたいのだ。オキモトは、他人に対する関係意識が過剰である。なぜそうなのかを、オキモトは説明している。オキモトがバス停留所のベンチで座っていると、「おや、何をしているんだらう」(204)という顔をされた。さらに、オキモトが歩いていると、「どちらにいらっしゃるんですか」(205)でなく「歩いているんですか」(205)と言われた。保育園の園児のころ、保育さんに「フツに歩いてごらん」(205)と言われた。笑うたびに「どこか痛いのかい」(206)と問われたので、笑いの練習をした。こうした例を挙げた後で、「人生は難しいんだ。フツに立ったり座ったり、笑ったりしゃべったりしている人間にはわからないんだらうけどもね」(208)と結論付ける。

人々から見ると、オキモトは奇妙な歩き方や笑い方をする、へんてこな人間であるらしい。別役実は評論「歩くこと」(『電信柱のある宇宙』)において、ある舞踏家の歩く姿に、「「歩く」ことそれ自体の厳肅さ」(26)を見ている。さらに、以下のような考察をしている。

我々が歩いていると、たいてい人は「おや、どちらへおでかけですか」と聞いていく。決して「おや、歩いているのですか」とは聞いてこない。人々にとっては「歩いていること自体」よりも、「何のために歩いているのかな」ということが、ひとまず重要だからである。しかし、我々がもし本当に「歩く」ということがどういうことであるかを知り、同時に、その知り得た方式に従って「歩く」ことが出来たら、人は当然「おや、歩いているのですか」と聞いてくるであろうし、そうでなければならない。その時こそ、「歩く」こと自体が感動的なのである。(26)

普通の歩き方をする人々は、「歩く」こと自体には関心がなく、どこに行くのかに注目する。その結果、「歩く」行為は無意識に委ねられ、円滑な動作として、他人の注意を引かない。だが、オキモトは自分が他人からどう見えるかを過剰に意識しているため、「歩く」ことを意識して歩く。そのため、普通の歩き方とは異なっているらしい。

別役実は評論「笑うこと」(『電信柱のある宇宙』)において、フィリピンのルパング島から帰

(24)

還した元日本軍兵士の小野田さんの表情を例に挙げて、戦前から戦後にかけて日本人の笑いの表情が変化したと指摘している。帰国直後、小野田さんは「決して笑おうとしない、かたくなな、ぎこちない表情」(42)をしていたが、その後、現在の日本人の表情に同化していった、と言う。

我々は、「笑う」ことによって、「現実」と呼ばれる大地に対して優越感を抱き、それを理知的に対象化し、更にそれによって一瞬、自然の因果律から遊離するようになる。…我々は、自然の因果律に対する緊張感を失い、従ってそれから遊離するかもしれないという恐怖を失い、それによって我々の生命現象が一瞬停止するかもしれないという不安感を失ったのである。(46)

オキモトは、あけすけに笑うことによって生じる事態を、無意識にせよ恐怖することができるらしい。「どこか痛いのかい」と思わせる笑いは、笑うことに苦痛が伴うような笑いである。あけすけな笑いに慣れた周囲の人々から見れば、オキモトの笑いは理解できない奇妙な表情となる。こうして、周囲の人々の中に溶け込みたいというオキモトの願望は失敗し続ける。

オキモトは、地域コミュニティの一員として周囲の人々に認められたいという願望を、「住まう」と言い表している。訪問販売会社の主任に「流れるより住まえ」(219)と言われて、妻のミナコと家を購入して暮らし始めるが、郵便局の窓口の男に「お前さんは、住んでないよ」(221)と言われる。実際、電信柱に登っているオキモトに向かって、街の人は誰も話しかけようとはしない。そこで、カゴメと呼ばれる職場の同僚に「子どもを産め」(225)と言われる。オキモトも妻のミナコも子どもが欲しいわけではなかったが、街に住みつくために子どもを作ろうとした。だが、生まれなかったので妻の妹の3人目の娘を養女にする。妻は、子どもを媒介にして街の人々と会話を成功させるために、娘のシノブを懸命に可愛がり笑わせようと努力するが、街の人々は「まあ可愛い」(229)とも「お嬢ちゃんですか、お坊ちゃんですか」(229)とも言ってくれなかった。公園デビューでも失敗した後、娘は交通事故で死亡する。葬式は妻の妹の家で行った。オキモトの家で葬式をやっている近所の人々がやってきて「アタシたちの住みつくための手がかりになったかもしれない」(232)とオキモトは後悔する。オキモトは周囲の他人たちに適応しようとしてあらゆる手段を講じたが失敗し続けた。

オキモトを見る他人の目を表象しているのが、舞台上に天から降りてくる「ブリキの巨大な目」である。この目は2回現れる。最初は尿をもよおしているときなので、「おい、向こうへ行け、この野郎」(216)と言う。そして、放尿するのを見て自分を笑うんじゃないか、と思う。2回目には、子作りの話の途中で「そうだろ」(226)と目玉に同意を求めているが、さらにさきでは、目玉に向けて「おい、あっち行け……。」(227)と言い、観客に「見たっていいよ。見られたって何とも思いやしないけど、どういう風に見ているのかわからないってのは苛々しないかい？」(227)と言う。たとえば、職場の上司がいつも自分を見ている、という意識をオキモト

は持っている。この視線は、川田耕の言う社会的権力の一つであろう。

オキモトは娘のシノブについて「お前は誰だって目で、こちらをじっと見ている」(228)と回想する。そして、再び舞台の目玉を見て、「あれだ……。その目だよ……。ただ見てるだけって目だ……。」(228)と言う。何も考えていない目を前にして、みずからが吐き出した蜘蛛の巣のような過剰な関係意識に捕らわれて、身もだえして苦しんでいる。他人の目にいつも脅かされ、支配されるのだった。オキモトにとって、他人の目は、微分化された社会的権力の硬く鋭い破片だった。自殺した中学生にとって、「葬式ごっこ」に参加した同級生たちの薄い笑みがそうであったように。

認知症の元同僚から「ドナタサマデゴザンショウ」(224)と言われて、オキモトは「ほとんどアタシはアタシ自身、ドナタかなって思ってしまった」(224-5)のだった。自分は何者なんだろう、という疑問をオキモトは抱いている。他人たちの気持ちを推測しつづけ、周囲に同調したいと願うオキモトだが、主任には「お前さんはセールスマンには向かないよ」(218)と言われ、街の人々にはコミュニティの一員と認められないで、人々への適応に失敗してばかりである。他人により肯定的な評価を得られないために、自己とは何かを形成することができないらしい。

娘シノブの交通事故死への罪責感から、妻は精神不安定となり、二人で家を出て週決めのアパートを借りて転々とした。「流れる」生活が続いた。ある日、妻は風呂場で包丁を首に刺して自殺する。夜明けにそれに気づいたオキモトは、自分の手を妻の血に浸して包丁を握り、指紋を包丁に付けてから、アパートを出てその日のセールスの予定の地区に向かった。これが、そもそもの舞台冒頭のオキモトのありさまであることを、芝居の終盤になって、観客は理解する。なぜオキモトは罪を被ろうとするのか、自身が語る。「シノブが死んでしまって、ミナコまで行ってしまったとなると、アタシがこの世につながっているものが何もなくなってしまう……牢屋に入れられたら、もしかしたらそこが、アタシのはじめての住まいになるかもしれないよ。」(234-5)と言ってパトカーを待つが結局やってこなかった。ミナコは妹に自殺について電話で語っており、遺書を残していたので、オキモトは疑われなかったのだ。

オキモトは、自殺した中学生のようにいじめられているわけではないが、いじめられた中学生に似た状況を生きてきた。周囲の他人集団から受け入れてもらえず、いつも不安だった。関係の中で翻弄され続ける「孤」であった。妻のミナコが自殺したことを知って、血の中に手を浸して犯罪者になろうとするが、これは戯曲中の唯一のオキモトの行為であった。ところが、ミナコが自殺を妹に告げているため犯罪として認知されず、行為として成立しない。オキモトは、内部指向型の近代的個人のような行為者にはなれない。

この芝居の最後のシーンは、最初のシーンと同じ歌を口にして、再び、なぜ雨でもないのに雨傘をさすのか、と自問する。

そうだよ……。傘の下には人がいる……。つまり傘がないと、アタシはどこにもいないんだ

(26)

……。

もうこのトランクには、何も入っていない。主任にクビにされたからね……。でも、あたしはセールスマンなのさ……。アタシがアタシであることを売りに行く……。傘が通ったらそう思っておくれ、その下にアタシがいる……。 (240)

アーサー・ミラーは、*Collected Plays* の序文において、ウィリーが売っている商品はほかならぬウィリー自身である、と言う。この点では、オキモトの最後のセリフに一致するが、強い他人指向性をもつオキモトは、同調すべき他人をすっかり失ったとき、恐るべき孤立とともに狂気のような自由を手に入れた。だが、この自由は、リースマンが自律性と呼んだ状態とはまったく異なる。内部指向性の傾向の強い人間であるウィリーが、他人指向型社会への同調に失敗して破滅したのに対して、オキモトは関係意識において他人指向性が強いいため、他人指向性の矛盾を極限まで生きたのだった。そして、他人指向の殉教者として颯爽と歩き始めた。

引用・参考文献

別役実「風のセールスマン」『やってきたゴドー』論創社、2010

———.『電信柱のある宇宙』白水社、1997

———.『ベケットと「いじめ」』白水社、2005

Miller, Arthur. "Death of a Salesman" *Collected Plays*, London: Gresset Press, 1965

アーサー・ミラー 西田実・宮内華代子 編著『アーサー・ミラー』山口書店、1982

———. 倉橋健 訳『セールスマンの死』早川書房、2013

大野邦夫「ドキュメント文化と社会的性格-D. リースマンの思想に基づく考察-」『情報処理学会研究報告デジタルドキュメント』情報処理学会 第100号 pp.51-8, 2007

川田耕「D. リースマン「孤独な群衆」-画一化と多様化」『思想の科学 第7次』思想の科学社 第146号 pp.34-6, 1991

経済産業省「社会人基礎力」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>

Welland, Dennis. *Arthur Miller*, Edinburgh: Oliver and Boyd, 1961

リースマン 加藤秀俊 訳『孤独な群衆』みすず書房、1971

Riesman, David. *The Lonely Crowd*, London: Yale University Press, 2001